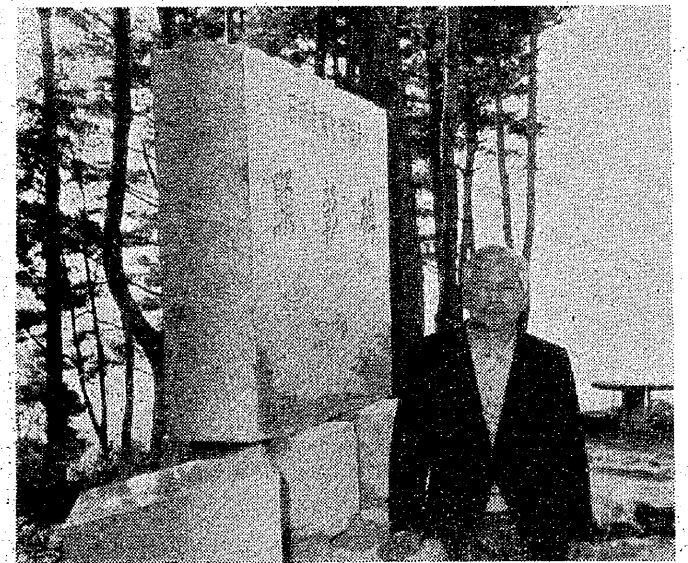


石炭産業と労働者の 「顕彰碑」を建立

石炭史研究の坪内さん

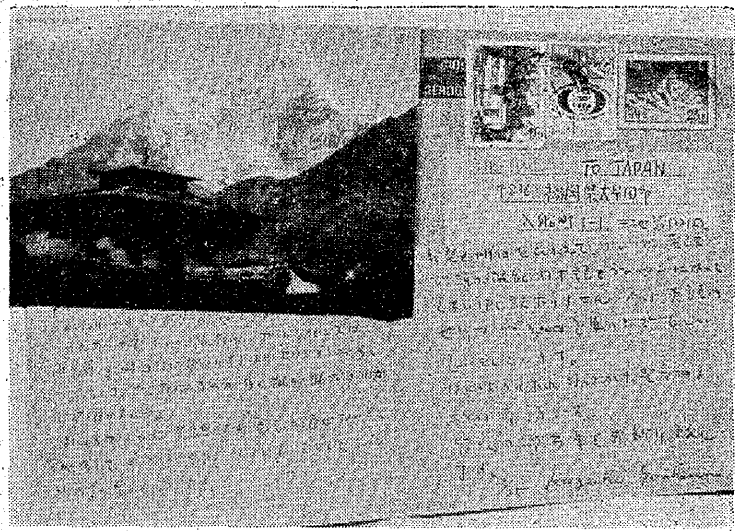
佐賀県の産業発達史、なかでも石炭史の研究を続けている伊万里市大川町東田の坪内安衛さん(五十五歳)が、念願の「石炭産業と労働者顕彰碑」を、自宅から約一キロ離れた八幡岳(標高七百六十四メートル)の中腹に建立させ、三月三日除幕式が行われました。坪内さんは昭和三十五年伊万里市にあった向山炭鉱に採炭夫として入り、四十五年十月、同じ伊万里市の立川炭鉱が閉山したときの労働組合(炭労系)の委員長でした。その後三池炭鉱に入社。昨春定年退職されましたが、本紙にも寄稿されたことがあります。



伊万里湾をのぞむ「顕彰碑」と坪内さん。

石炭史の研究は向山炭鉱の時代から取り組んでおり、ほう大な資料にうまる自宅は、まさに「石炭資料館」です。現在は九大の学外研究員でもあり、近く研究の成果をまとめ出版されるという予定です。顕彰碑は、坪内さんの郷里愛媛県から運ばれたもので、縦九十四センチ、横百四十三センチで、三層の絵が刻まれ、裏面の碑文は「炭鉱記録を残す会」を主宰してきた坪内さんの「佐賀県石炭産業始末記」と題した、石炭史の概要がほりこまれています。

坪内さんは「産業の発達史は、とかく大企業を中心にならざるを得ない」として、中・小の経営者や労働者の貢献が見捨てられてきたと、それへの遺憾が石炭史にあらわされた」と話しておられました。



いよいよキヤラパンを開始。5月初旬に登頂へ。ネパールから届いた絵葉書と通信。

ラムジエン・ヒマールに挑戦

吉野和記さんから現地便り

吉野和記さん(六分金・四山、四十一歳)が隊長をつとめる「福蘭山ラムジエン・ヒマール登山隊」は、カトマンズでの諸準備を終えていよいよキヤラパンに出発しました。このほど二回にわたって現地報告が届きましたので、第二信を伝えます。

今日でカトマンズ滞在も一週間目となりまして。前に一回来ていたのですが、忘れていたのではな

狭い街なのですぐに思い出し、牛が歩き、はだしの子供もはだかの子供もいたりして、けっしてきれいな街ではありませんが、人々の生活の匂いが浸み込んでくる感じがします。

食事もとてもおもしろく、よくにチョーメンという日本の焼そばに似ているのが、とてもおいしいものでした。

私は、こちらに来てからもう一ヶ月、今日でおおよそ九パーセントがわり、あとはトランシーバーのインポートライセンスをもらうだけです。こちらのL・Oはインサティの人々たつ役所は、手続きが多くのセクションに分かれていて、一つの許可をもらうのに一日かかったこともあり、とくに隊荷のインポートライセンスは、商業省、税関局などびくびくするほどセクションが多く、うろちうろちしました。なにしろ人が多く、誰が誰かわからな

桜花らんまんの四月、あこがれの久商入学。新一年生のういういしい幼き顔、あどけない顔。(昭和十四年)

二年生になる。秋の大運動会は中止。金学年大宰府までの復行軍。足が棒になり、豆また豆。修業日誌には泣かされる。三年生の修業旅行は、阿蘇一泊。当日のつくし雨中をどろんどろん下山。栃ノ木の小山旅館に到着。途中放火に追われる。宿の好意により、制服を炭火で乾燥。翌日は乾いた制服で水前寺公園を見学して帰る。また、旅館での風呂に黒ネコ印の黒ツンドシで入浴した人があったが、下の方が気になる年ごろであった。

四年生。勤労奉仕も稲・麦刈

り、高山彦九郎公園の上連ひ、慰霊塔の奉仕作業を思い出す。三月十日の陸軍記念日、市内の中学生(旧制)による市街戦があり、恵比須座の前で小生戦死も予科練などへ果立つもの多し。

以上は、久留米商業時代のアルバムの中の一片である。まことになつかしい思い出ばかりである。

校内暴力や青少年の非行化問題など、狂った現代の世相と対比してみる時、時代の流れとはいえ雲泥の差がある。

あれから四十年の歳月を生きて抜いてきたのだと思うと、感無量なるものがある。まさしく、人生五十功名を恥す、であ

追 想

退職者 山下 みのる

追 想

退職者 山下 みのる

書 評

武松輝男 著
「坑内馬と馬夫と女坑夫」
七分金(四山) 村中 利行

昭和六年、坑内から因徒、女坑夫、馬、馬夫がいなくなつてから五十年になる。半世紀前の、あまのりづがたがたでない部分へ挑んだ武松さんの執念が読みとれる。三池炭鉱は百年以上の歴史があり、日本の近代化の基幹、エネルギー産業の日向を刻んできた。この「坑内馬と馬夫と女坑夫」という声があるかも知れないが、この本を一読されると今

釣りを始めて二年ほど経った頃、季節も秋に入り、いまの四山鉱地先の堤防の曲がり角で一本の竿を振り込み、流し竿でセイゴの脈釣りを楽しんでいた。その夜は、潮もよし今にも雨の降りそうな夜空で、釣りに絶好の条件であった。

向かいの灯台と堤防では、釣り人の電灯の光が数条動き、点滅している。こちらの、坊主といわれている堤防の先端にも、「ピカリ、ピカリ」と懐中電灯の光が動き、魚の当たりを知るため竿に取り付けた鈴の音から三人くらいが楽しんでいるようだった。

「ゴン、ゴン」魚が小さいほど当たりが大きく、軽く合わせると十五センチほどの当歳魚である。

当たりにつられて、振り込みから七、八メートルくらい離れたところか。

「チリン」という音に、振り込んだ所にもどるとしたとき、ガリガリと竿を引き出す音にびくびく驚天。手に持っていた竿を振り投げ、頭から突っ込んで、「ガシッ」と海に落ちる寸前の竿を取り押さえた。

昨日完成したばかりの手作りの竿である。なんで放してしまつたのか。

「ほんっと一息つく間もなく、グーン」とくる重い絞込み

倒れたまま歯を食いしばって堪える。糸と竿は一直線になり、糸だけの抵抗力が勝負というところになった。竿を立てることもできなかった。

そうしているうちストンと軽くなり、手ごたえがなくなつてしまった。

「しまったアー」

起き上がると、ヒザ、ヒジがすりむけてビリビリする。あちこち痛むし魚はずれるので、力なくリールを巻きながら海を見ていると、目の前の水面で魚らしいものが大きく反転した。と同時に、俺の体が引き倒されるほどの強い衝撃を受け、手に持つ竿は根元から曲り、「バリバリ」と音をたて糸鳴りをはじめた。

「この野郎。はずれたと思うとったらー」

こんなに強い引きを見せる魚は初めてで、ひざがガクガクふるえ出し、とうとう座りこんでしまった。

「馬鹿ッ。立ちまらんなら、そんな魚はずすてアッ」

いつ通りかかったのか、後から大鳴され、震えがピタリと止まった。

その人の助言と手助けで、ようやく魚を手にとりてみてまたおどろいた。

「一貫三百じゃな」といつて、何事もなかったようにスタスタと坊主に行くベテランの後姿を見て、またハナハナと座りこんでしまった。

釣りにキチ余談 連載第三回
一貫三百の巻
十九分金(三川) 石田 鈍竿